大阪インターナショナルチャーチ　　アリステア・マッケナ師　　2015/8/16

ヨハネ 13:31 –14:4

13:31 ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今こそ人の子は栄光を受けました。また、神は人の子によって栄光をお受けになりました。 13:32 神が、人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も、ご自身によって人の子に栄光をお与えになります。しかも、ただちにお与えになります。 13:33 子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。 13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。 13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」 13:36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ。どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」 13:37 ペテロはイエスに言った。「主よ。なぜ今はあなたについて行くことができないのですか。あなたのためにはいのちも捨てます。」 13:38 イエスは答えられた。「わたしのためにはいのちも捨てる、と言うのですか。まことに、まことに、あなたに告げます。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」14:1 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。 14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。 14:4 わたしの行く道はあなたがたも知っています。」

導入

先々週、私たちはヨハネの福音書の物語の核心部分に差しかかりました。ユダが食事の場を離れ、イエスを裏切るために夜の闇に消えていきました。ユダが出て行くとすぐに、イエスが弟子たちを教える霊的な状態が整いました。イエスはご自身の十字架と昇天に備えて弟子たちに前もってお教えになります。

イエスが主の聖餐を始められたのは、ユダが出て行ってからでした。ユダはイエスを心から信じていなかったので、聖餐に加わることができませんでした。

ユダは、暗闇の君サタンに操られ、夜の闇の中にいました。一方、世の光であるイエスは、弟子たちとともに愛と真理を分かち合っておられました。

そこにはイエスと弟子たちだけでした。こうして、とても大切な会話が始まりました。この会話は、「二階の広間でのやり取り」と呼ばれます。

イエスはこの機会を用いて、弟子たちにいくつかのことをお教えになります。その内容は、これから数週間にわたってみことばを学びながら見ていきましょう。

ここから17章の終りにかけてイエスが弟子たちにお教えになることはとても重要です。イエスの昇天から再臨の間にイエスの弟子として生きるとはどういうことかを教えてくれます。その会話の中で、イエスは終始、離れ離れになる期間に対する弟子たちの不安を払しょくしようとなさいます。

この部分の会話は、ヨハネの福音書全体の目的においても欠かせません。

イエスを信じてこの世でいのちを得ること、そして死後のいのちを得ることについて解き明かされています。

1. 神の栄光（13：31-32）

イエスは、神が今栄光をお受けになる、と弟子たちにおっしゃいます。そして、イエスが神にあって栄光を受けるともおっしゃいます。人間的な考えでは、十字架上でイエスが惨たらしく死なれることが神に栄光をもたらすというのは理解しにくいことです。

私たちが考えなければならないのは、イエスが父に栄光をもたらすとはどういう意味かです。

答えは常にみことばの中にあります。今回は、ヨハネ17：4を見てみましょう。

ヨハ 17:4 あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。

イエスは、神に栄光をもたらそうとしておられました。というのも、神がイエスに与えられたこの世での使命を果たそうとなさっていたからです。

私たちもこのようにして、神に栄光をもたらします。神が召してくださった働きを忠実にすることによってです。

イエスにとって、神の召しは、失われた罪人、つまり私たちのために十字架で死ぬことでした。また、イエスが死から復活して天に帰られることも神のみこころでした。

神は、私たち一人一人にご計画と意義を持ってくださっています。そして、神のご計画に従う度合いによって、私たちはこの世で神に栄光をお返しします。神が私たちに持ってくださるみこころは、みことばの中に示されています。私たちはそのみこころに従うことで、神に栄光をもたらします。

霊の戦いは「栄光の問題」です。私たちが神に従い、みことばに従うなら、神の御名に栄光をもたらします。一方、私たちが神のみことばに逆らい、自分勝手な道を進み、自分の思った通りに生きるなら、悪魔に栄光をもたらしてしまいます。

本当に新生した信徒なら、悪魔に栄光をもたらしたいなどとは思いません。ですから私たちは、どんな犠牲を払ってでも、神のみことばに堅く立ち、従わなければなりません。そうすれば、常に神に栄光をお返しすることができます。

イザヤ書14：12-15には、サタンのもくろみが明らかにされています。

14:12 暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。 14:13 あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。 14:14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』 14:15 しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。

イザヤ書のみことばから、サタンが神のようになりたがったことは明らかです。しかし、神はご自身の栄光を他のものと共有なさいません。ですから、サタンに従わないでください。それは失望と敗北への道です。サタンはすでに、イエスの十字架によって打ち負かされているからです。

2. イエスの発表と弟子たちへの呼びかけ（33-38節）

イエスは弟子たちに向かって大切な発表をなさいます。イエスは、もうあと少ししか弟子たちとともにいないとおっしゃいます。彼らがすぐには来られないところに行かれるというのです。

このイエスのことばに、ペテロは反応しました。ペテロは、イエスのためなら死ねるとイエスに言いました。ペテロはイエスを愛していたので、イエスについていきたいと思いました。しかし、

イエスはペテロの心をご存じでした。支配してくださる聖霊の力なしには、ペテロが弱い者であることをイエスはご存知でした。

ですからイエスは、次の日の早朝に鶏が鳴く前に起こることを前もってお伝えになりました。イエスは、あなたについていくと言う人に向かって「あなたは三度私を知らないと言う」とおっしゃいました。

この預言は、語るイエスにとっても、聞くペテロにとってもつらい内容でした。

ペテロのイエスへの愛は、その後の24時間くらい耐えられるものだと思うでしょう。

実際にはそうではありませんでした。

ペテロはしくじりました。イエスは34-35節で互いに愛するようにと呼びかけられましたが、ここに記されたかたちでイエスを愛する備えがペテロにはできていなかったからです。

13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。 13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

ペテロがしくじったのは、神の聖霊にまだ満たされていなかったからだということは容易にわかります。頭ではイエスに従いたいと思い、最善を尽くそうという気持ちはありましたが、心がまだ聖霊によって神の愛で満たされていなかったのです。

私たちも自らの心を吟味することなく、ペテロを批判しないようにしましょう。

神の聖霊によって新しく生まれ、聖霊に満たされていなければ、34-35節のイエスの呼びかけに従うことはできません。

自力でイエスの弟子になろうとしても、失敗します。聖霊を受けずに、イエスのように人を愛そうとしても、できません。

イエスのように愛そうと思うなら、イエスの愛が私たちの心の中に生きていなければなりません。

これは、私も含めてすべての人への課題です。

イエスは35節で、イエスが私たちを愛してくださったように私たちが他の信徒たちを愛し、イエスの愛を示すなら、イエスの弟子と認められるとおっしゃいます。

つまり、お互いに対する愛の行いが、私たちが弟子であることを証明するのです。

その愛とは、欠陥のある人間の愛ではありません。私たちの心に住まわれる聖霊によるイエスの愛です。この愛が、私たちがイエスの弟子であることを世に示します。

このメッセージはネット上で公開されるので、個人的な証を分かち合うか迷うところですが、今回は証を皆さんにお分ちしなければと思いました。私たちの心にあるイエスの愛について、また神の超自然的な愛をもってすれば愛しにくい相手でも愛せることについて、うまくお伝えできると思ったからです。

私の幼いころから父は非常に短気な人でした。激情して、母と私に対して暴言や暴力が出ることもありました。父に殴られることもあった私は、父に対する人間的な愛情を感じずに育ちました。幸い、全寮制の学校に通っていたので、父の暴言・暴力からずいぶん守られました。

25歳で神に立ち返った私は、神の聖霊に満たされました。そのときから、人間の愛とは違う愛で父を愛するようになりました。

それは、イエスの愛としか言いようがありません。ある日、私は母に言いました。

「父さんがまだ生きていたら、ちゃんと愛せるよ。」

「あんな仕打ちをされたのに、どうしてそんなことが言えるの。」と母は言いました。

私は答えました。「心の中にあるイエスの愛をとおしてしかできないことだよ。」

皆さんにも、今は愛することができないという人がいるかもしれません。

赦せないと思うような仕打ちをあなたにした相手でしょうか。

私が皆さんに言えることは、心に神の愛が増し加えられるように祈ってくださいということです。神の愛によって、その人を愛することができるようになるからです。

人には不可能なことが、神には可能なのです。

聖霊による本物のクリスチャンの愛は、非常に説得力のある証です。信徒にとってだけでなく、未信者に対しても証となります。ご自身がいなくなることを弟子たちに発表された後、イエスが最初におっしゃったことは、「自然を超越した方法で」愛することでした。

3. <u>イエスから悩める弟子たちへの励まし（14：1-4）</u>

14章の1-4節で、イエスは将来についてすべての弟子を安心させようとなさいます。イエスの話を聞いて、弟子たちはとても不安だったことでしょう。彼らは、すべてを捨ててイエスに従ってきました。それなにの、イエスが彼らを離れてどこかに行ってしまわれるというのです。

イエスが弟子たちに与えられた慰めは、イエスご自身からだけではなく、父なる神からの慰めです。

イエスはこれまで、なぜ人は救われなければならないのか、どのようにして救われるのかに焦点を当ててこられました。ここでは、救われる目的を説明なさいます。

イエスによると、私たちは「天国」のために救われるとおっしゃいます。天国は、実在の人間がイエスと永遠を過ごせる実在の場所です。

弟子たちの心に思い煩いが起こった時、これこそ彼らに必要な慰めでした。

心が悩める時、人にはこの慰めが必要です。

天国は神が住まわれる場所、イエスが御父の右の座に座しておられる場所です。

新約聖書では、天国は少なくとも5つのかたちで描かれています。

a) 天国は、御国である。– ペテロ第二1:11

b) 天国は、資産である。– 1ペテロ第一 1:4.

c) 天国は、故郷である。–ヘブル11:16.

d) 天国は、都である。–ヘブル11:16.

e) 天国は、住まいである。– ヨハネ14:2.

「父」という単語は、ヨハネ13-17章で新改訳では45回登場します。この個所は、天国は父の家だと語ります。神の子の「家」なのです。

イギリスでは、クリスチャンが亡くなると、その人は「家に呼び戻された」と言います。これは、クリスチャンの死についての美しい描写です。聖書の教えに沿った方法で、慰めを与える描写です。

数年前、ロンドンの新聞社が、「家」をいちばんぴったり表すことばを募集しました。

最優秀に選ばれたのは、「家とは、一番よくしてもらえるのに、一番文句を言うところ。」という言葉でした。

しかし、天国の家はあまりにもすばらしすぎて、文句のつけどころがないでしょう。

「家」と訳された部分は、英語の聖書では「豪邸」と訳されている場合もありますが、ギリシャ語の単語は、住む場所という意味です。

ですから、7LDK の温泉とゴルフコースが付いた場所という意味ではありません。しかし、イエスがすべての信徒たちのために天国に場所を備えてくださっていることは確かです。天国で贅沢できるか心配することはありません。天国に行けることが贅沢ですから。

天国に何があるかより、何がないかのほうが大切です。

黙示録21章を見れば、天国にないものがわかります。

a) 天国には死がない。－黙示録21：4
ですから、愛する人との別れや悲しみがありません。

b) 天国には涙や悲しみがない。－黙示録21:4
人はあらゆる理由で涙を流します。おもに、傷ついて泣くことが多いでしょう。天国では、そのように感情を乱されることはありません。

c) 天国には痛みがない。－黙示録21:4
痛みは嫌なものです。痛み止めの薬もありますが、激痛を経験したことがある人もいるでしょう。天国では、肉体的な痛みを感じることはありません。

d) 天国では、罪が犯されることはなく、罪人もいない。－黙示録21:8
私たちが生きる世の中では、殺人やあらゆる悪事が日常茶飯事に起こっています。しかし、悪人は天国にはいません。天国では、泥棒や殺人者、虐待加害者など、あらゆる悪事を行う人を恐れる必要はありません。天国には、愛と親切が満ちています。

天国にないもの4つをここに挙げましたが、それだけでも、いつか天国に行けるのが楽しみになります。

確かめておくべきことは、あなたが死んだら天国に行けるかということです。

それを確約する唯一の方法は、神のみことばが語ることを心で信じることです。

聖書の神が、神とつながれるようにとあなたを造ってくださったと心から信じますか。（創世記2章）

アダムとエバの罪のせいで、この世に生まれるすべての人が聖なる神から引き離されたと信じますか。（創世記3章、ローマ3：23）

もしそのように信じているなら、ひとつ問題があります。それは、神の怒りと罰があなたにふりかかっているからです。（ローマ1：18）

私たちの罪に対する神の怒りをどうすれば免れられるでしょう。

私たちは自分で自分を救うことはできません。救ってくれる誰かが必要です。

あわれみ深い神は、ご自身の御子イエス・キリストを天から遣わしてくださいました。私たちを罪から救うためです。神がご自身の聖さを妥協することなく私たちを救うには、ご自身の御子を身代わりのいけにえとして罰するほかありませんでした。御子は私たちの罪の罰を負ってくださったのです。

この世のすべての人にとって、死後は天国か地獄のどちらかしかありません。死んでしまったら、もうやり直しはききません。

ヘブル9：27「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、」

罪の問題を解決してくれる唯一の方法としてイエスを信じるか、今決めるときです。他に救ってくれる人は誰もいません。天国に行く方法は、イエスをとおしてのみです。他にはありません。イエスを今、信じますか。

イエスは14：3で、また来るとおっしゃいます。

イエス・キリストの再臨は、とても大きなテーマです。今朝はこれについて十分お話する時間はありませんが、イエスはここで再臨について触れておられます。それは、弟子たちを励ますためです。

イエスの降臨についての預言は、すべての点において成就しました。ですから、イエスの再臨に関する預言についても疑う理由はありません。

イエスの再臨が近いことに勇気をいただきましょう。

適用

今日の個所を学ぶ過程で、すでに私たちに当てはめて考えてきましたが、メッセージを終える前に、大切な内容を3つ押さえておきましょう。

1. イエスの十字架の教えをとおして、神が栄光をお受けになられます。イエスの十字架について私たちが理解することで、神は栄光をお受けになります。神が栄光を受けられるのは、しるしや奇跡だけではありません。大きな教会堂を建てたり、たくさんの人が来たりすることだけでもありません。私たちが主イエス・キリストの十字架について教え、日常生活の中で神のみことばに従うとき、神は栄光をお受けになります。

2. 今イエスがそばにおられないことで、思い悩むかもしれません。このような曲がった世の中になぜ生きなければならないのかと疑問を持つかもしれません。そのような感情に対抗するには、永遠の視野を持つことです。この世を越えたところを見据えなければなりません。天国に片目を向けるということです。よりよい場所に行ける未来に期待を持つ必要があります。

3. クリスチャンの愛は、イエスの再臨を待つ世における説得力ある証です。クリスチャンのコミュニティは、魅力的な場所であるべきです。その決め手は、私たちの心をとおしてイエスの愛が注がれているかどうかです。